



TITLE:

花山だより(6月)

AUTHOR(S):

佐登兒

CITATION:

佐登兒. 花山だより(6月). 天界 1936, 16(183): 369-369

ISSUE DATE:

1936-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167257>

RIGHT:

花 山 だ よ り (6 月)

待望の皆既日食を目前にひかへて、休息状態の花山に5月16日の午後、オーストラリアのキャンベラのアトレン博士が6尺豊かな巨體を山本臺長夫妻と現はす。同17日の夕べ、花山第5觀測隊の荷物がトラックで搬出された。同19日より枝幸に於て花山第1觀測隊の機械据附けに参加して居た稻葉氏は、第5觀測隊の出發も近づいたので、同25日枝幸發、同27日東京經由で歸臺、直ちに堀井氏とオムスク行の最後の準備に忙殺された。30日花山第3觀測隊の高城氏は大阪の園藝家で、眞摯なアマチュアの大石周作氏と急ぎ目的地遠輕へ出向した。

6月2日午前チェコ國プラハ天文臺の Slouka, Hujer 兩博士及 Kopal, Jaschek の4氏花山を訪問、各々流暢な英語を操りつゝ記念撮影をする。

3日午前花山の日食隊の殿軍を承つて、第5觀測隊が臺長山本博士、稻葉氏(堀井氏は都合で2日夜出發)等の一行はチェコの Slouka 博士等一行、竹田助教授等多數の見送りを受け、一路シベリア・オムスクへの壯圖についた。同4日北海道觀測隊の總指揮者竹田助教授、同8日山本夫人は各々枝幸へ、草場氏は遠輕へ赴いた。

留守隊としては中村氏、太田氏、豐田氏、龜島氏等のみ、いたづらに盛り上る青葉の花山に、山蟬の聲愈々喧しく、満開の5月、霧島も色褪せると共に、宿舍の畠には撫子のみ満開、留守隊と見てか、山兎が4、5匹テニスコートに毎夜出動して盛んに跳躍、圓い糞を増やす許り。

たゞ南天に煌々たる木星の日食を30種の屈折望遠鏡で眺めて19日を想像する。シベリア、滿洲、北海道の各觀測地より力強い通信を受けた留守隊員は、たゞ觀測地諸氏の成功と健康を祈る。

内地は梅雨の入りもものかは大體連日の好天氣。觀測地の19日は雨が晴か、願はくば、せめて19日だけは晴れて呉んろよ。

—(6月18日、佐登兒)—